

日韓の古代史には どんな謎があるのか

Kang Hibong
康熙奉

渡来人は いかに やって来たか？

特別史跡 百濟寺跡

飛鳥、京都、信州、浅草、高麗……

各地に残る渡来人たちの足跡は何を物語るのか？

日韓の古代史にはどんな謎があるのか

康熙奉

星海社

364



SEIKAISHA
SHINSHO

はじめに 日本各地に残る「渡来人の謎」をどう捉えるのか

行ったことがない新しい土地へ移っていくのは、多くの人にとって「あこがれ」であり「浪漫」である。

しかも、新しい土地では、自分が培った技術を高く評価してくれる。身に付けた知識も十分に生かせる……古代の朝鮮半島の人々にとって、日本は「列島」というより、気分的には未知なる「新大陸」だった。

朝鮮半島の地政学的な位置が大きく関係していた。西は中国大陆であり、恐ろしい大国がひんばんに朝鮮半島に攻め込んできた。生活の安定を求めるなら、東に向かうのが最も無難だった。

明確な理由があつたので、朝鮮半島の人にとって、日本はいつか行つてみたい新天地に思えてきた。

その強い意識は、現代人には想像もできないかもしれない。

しかし、現実には極端だった。朝鮮半島から日本に渡来してくる人がどんどん増えていったのだ。

渡来人は進取の気性がまさっている人たちだ。つまり、あえて海を渡ろうと考えた人は、新しい土地で何かを成し遂げようとする気構えを持っていた。結果的に、渡来人は強力な一族を形成するに至ったし、日本に残した痕跡も目立っている。

それでも、日韓の古代史には謎が多い。記録されなかった事実があまりにも多すぎるからだ。

とはいえ、記録は残っていないくとも、状況証拠によって隠れていた事実が見えてくることもある。

いま改めて、渡来人の足跡をたどる中で生まれた謎を整理していくと、次のことが該当してくる。

- 浅草寺の本尊の発見にはなぜ渡来系の姓名が関わっているのか
- 善光寺の絶対秘仏は本当に百済からやってきたのか
- 未開だった京都は渡来人の有力一族によって開拓されたのか
- 「白村江の戦い」の敗戦は渡来人の動向にどう影響を与えたのか

- 近江国で突然出土した巨大な塔は誰がつくったのか
- 武蔵国に移住した高句麗人の1799人はその後どう生きたのか
- 関東武士の誕生に騎馬民族国家の高句麗が果たして関係しているのか

このように列举してみたが、すべて日本の古代史に不思議な謎を提供している。まさに、「火のないところに煙は立たない」と思わざるをえない。事実となる根拠「火」があつたから、その現象「煙」が現れたのである。しかし、それは記録されることが少ないので、今では謎として残ってしまった。

ありがたく思えるのは灰「痕跡」が残っていることだ。それを見逃さないことが、日本と韓国の古代史を考えると特に重要だろう。その際に必要なことは、古代を信じる想像力だ。

古代はただ古いだけでなく、人間が確かに生きていた記憶と形を現代人に示してくれている。それを見極めるようにしたい。

そのためには旅をするしかない。悠久の古代に思いを馳せながら、日本の各地に残る渡来人の「生きた証」を訪ねてみよう。

目次

はじめに 日本の各地に残る「渡来人の謎」をどう捉えるのか 3

第1章 日韓の古代には何が起こっていたか 11

- 1 鉄が結び付けた日韓古代史 12
- 2 紀元前の朝鮮半島 16
- 3 「七支刀」と「広開土大王の碑」 20
- 4 百済が滅亡 26
- 5 新羅が三国を統一 30
- 6 歴史書は何を語っているのか 32
- 7 日本の古代における時代区分 36
- 8 渡来してきた人々 39

第2章

渡来人の正体はどこまでわかるのか

49

9 漢字の読み方に関する共通性 41

10 日本に仏教を伝える 46

1 文化の担い手 50

2 戦乱を避けた人たち 53

3 『三國史記』は日本をどう記述したか 55

4 正式な国号はいつ頃から使われたか 59

5 檜前と高松塚古墳 61

6 キトラ古墳の壁画 66

7 飛鳥寺はどこから影響を受けたのか 70

8 古代を彷彿させる飛鳥の風景 74

第3章

著名な仏像はどんな由来を持っていたか

79

1 善光寺の秘仏に宿る祈りの旅路 80

2 浅草寺の由来が語っていること 86

3 東漢氏は何を残したのか 92

4 耽羅国と日本 95

5 広隆寺の弥勒菩薩半跏思惟像 98

6 果たして秦氏とは誰なのか 101

第4章

朝鮮半島が日本に及ぼした影響をさぐる

109

1 百済王神社と百済寺跡 110

2 百済復興の危険水域 115

3 大敗した「白村江の戦い」 118

第5章

東国の渡来人は何を残したのか

139

4 百済に関わる子孫たち 121

5 近江の地に不思議な石塔がある 127

6 高句麗人の東国開拓は大磯から始まった 132

1 辛科神社を訪ねる 140

2 多胡碑に刻まれた渡来人の誇り 144

3 聖天院の高麗王廟 150

4 渡来人の東国移住 156

5 かつての高麗郡の名所を訪ねて 159

6 新羅郡の設置 164

7 日本で馬の文化がいつ定着したのか 167

8 強力な武士団の形成 171

日韓古代史／年表
175

超解説／20分で日韓古代史の全体像がつかめる
180

おわりに
199

写真／康熙奉
写真提供／石上神宮
図版／ジエオ

第1章

日韓の古代には何が起こっていたか

1 鉄が結び付けた日韓古代史

鉄の王国

今から2千年ほど前の話である。

農耕で生産性を上げるには鉄を使った道具が有効だが、当時は日本で鉄ができなかった。朝鮮半島から持ってくるしかなかったのだ。

かつて鉄の供給地になったのが、伽耶（カヤ）であった。伽耶は、伽倻、加耶、加羅などと表記することもあるが、朝鮮半島南東部に位置する洛東江（ナクトンガン）の流域に広がっていた国で、先進の製鉄技術を持っていた。

特に、伽耶が有力な鉄の産地になっていたのは、洛東江付近に良質な鉄鉱石があったからである。

日本には弥生時代（紀元前後）から鉄器が「完成品」として伝来している。実際に、農具・武器・装身具などが有力者の墓から出土している。

また、古代の遺跡の発掘から、伽耶が日本に鉄をたくさん供給していたことが立証されている。

伽耶は「鉄の王国」として日本にとって不可欠な鉄供給地であったし、4世紀まで日本は伽耶から鉄を持ち込むしか方法がなかった。

実際、九州北部と朝鮮半島との交流は活発であり、共通の生活圏の中から鉄器や鉄素材が日本に入ってきたのである。

当時、伽耶では人手が足りなかった。

そこで、労働力の供給源となったのが、日本から来た人たちだった。その頃は朝鮮半島より日本のほうが、人口が多かった。

かけがえない宝

日本から朝鮮半島に渡る交通手段をすでに当時の人たちは持っていた。

海峡の飛び石となる壱岐や対馬があり、波が穏やかな日を選べば、海を越えることが可能だった。

現代的な国境の概念があった時代ではない。九州北部や本州西端と伽耶は同じように自

由に往来して交流を重ねていたと思われる。

そのうち、日本からやってきて伽耶に定住する人たちもいた。それほど、鉄が作れる土地は魅力的だったのだ。

こうして日本から来た人たちは「倭人」と呼ばれた。伽耶から見れば「風俗が少し違う人」という意味合いだろう。

伽耶にいた「日本からの渡来人」……すなわち「倭人」は数も増えて一定の勢力を保持するようになった。

製鉄に従事していた人も多かったと推定される。

なんといっても、日本で作れない鉄を郷土に持つてくるという重要な役割を持っていた。当時としてみれば、鉄は「かけがえのない宝」であったことだろう。

海を渡る人の往来を促した金属

日本列島において本格的に鉄が国内生産されるようになったのは、4世紀末である。この時期に出雲（現在の島根県東部から鳥取県西部にかけての地域）などから九州北部などで「たたら製鉄」（砂鉄を原料とする日本独自の製鉄方法）が行われていた痕跡が見つかっている。

日本で鉄を国内生産しなければならない事情があった。

新羅^{しらぎ}（シルラ）が国家的に勢力を拡大し、伽耶の鉄資源を掌握するようになったからだ。結局、伽耶は新羅に吸収されるのだが、そういう運命が予測できていた。そうになると、日本は重要な鉄の供給源を失うことになるので、その前に日本独自の「たたら製鉄」を発展させる必要があった。

こうして、出雲は古代から日本を代表する鉄の産地となった。「良質な砂鉄がとれたこと」「製鉄に必要な木炭をたくさん供給できるほど森林資源が豊かだったこと」などが主要産地になった理由だ。

つまり、日本の鉄文化は朝鮮半島との交流を基盤に発展し、出雲を中心に独自の製鉄が始まっていった。

砂鉄製錬には大量の木材を必要とする。伽耶では鉄のために禿山になった地域が多かった。大陸的な乾燥も影響していたが、湿気が多い日本の場合は樹木の復元力が高かった。それゆえ、朝鮮半島のようにあたり一面を禿山にするということにならずに済んだ。

そういう地域的な特性があったので、朝鮮半島南東部で製鉄に従事していた一団が、出雲に渡来したというのも十分に根拠があることだ。

結局、農具と武器という両面で不可欠だった鉄は、日本国内で王権が徐々に確立する中で、その「力の源泉」になったのである。鉄製の武器は軍事力の象徴であり、強者たちの支配力の裏付けだった。

以上のように、鉄は日韓の古代史を語る上で、絶対に外せない重要な金属であった。鉄が、海を渡る人の往来を非常に活発に促していたのだ。

2 紀元前の朝鮮半島

始まりは古朝鮮

日韓古代史を考え始めると、「百済くだら（ペクチエ）」「高句麗こうくり（コグリョ）」「新羅しらぎ（シルラ）」という国名がひんばんに出てくる。

どんな国だったのか。

それぞれ関係性はどうかだったのか。

三国は日本の古代に多大な影響を与えた国なので、まずは「百済」「高句麗」「新羅」の成り立ちを知っておかないと、当時の情勢がわからなくなってしまう。そこで、日本の古代を知るためにも、朝鮮半島の古代史から話を始めたい。

最初は神話のような話である。

朝鮮半島で最初の国家を打ち立てたとされるのが、神秘の人物・檀君（タングン）である。彼は今なお「民族の始祖」として韓国で語り継がれており、建国した「檀君朝鮮」は、神話の霧に包まれた理想の王国として記憶されている。

ただし、その存在は考古学的には確認されておらず、あくまで伝承の世界に咲く幻想の花である。

檀君朝鮮の後、箕子（キジャ）朝鮮、衛満（ウィマン）朝鮮という国が続き、この3つの国家を総称して「古朝鮮」と呼ぶ。

だが、このうち実在が考古学的に証明されているのは、衛満朝鮮のみである。ゆえに、史実に基づく朝鮮半島最初の国家とは、衛満朝鮮ということになる。

この衛満朝鮮は、紀元前195年から紀元前108年まで存在したと推定されている。衛満とは、古代中国の燕から亡命してきた野心的な人物であり、朝鮮半島北部を拠点に勢

力を広げていった。彼の拡張政策は、ついに漢の武帝の怒りを買ひ、国家は滅びの道をたどることとなった。

三国の成立

衛満朝鮮の滅亡後、漢はこの地を直轄地にして、楽浪郡など4つの郡を設置して支配を強めた。

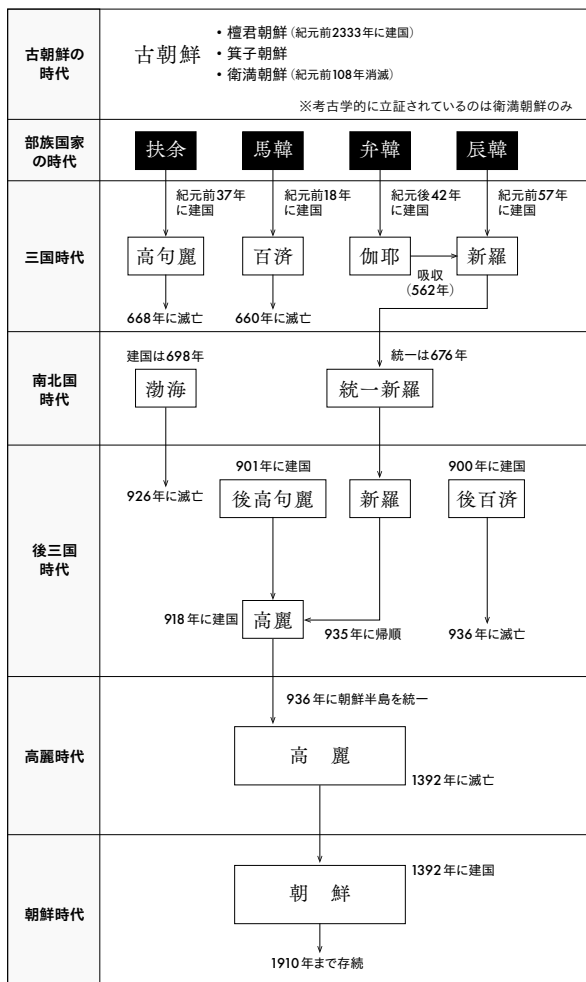
しかし、広大な土地には、なお土着の部族たちが脈々と息づいていた。中でも特筆すべきは、勇猛果敢で礼節を重んじた扶余（フヨ）という部族である。彼らの中から出た勇者が、紀元前37年に高句麗を建国した朱蒙（チュモン）だった。

また、朝鮮半島の中央から南部には、馬韓（マハン）、弁韓（ピョナン）、辰韓（チナン）という部族連合が存在し、この時代を「三韓時代」と称する。豊かな土地と気候に恵まれ、それぞれが独自の文化と信仰を築いていた。

馬韓に属していた伯濟（ペクチエ）は、中心的な存在として百濟を築き上げた。建国は紀元前18年。辰韓は力を蓄え、新羅へと発展し、その建国は紀元前57年に遡る。

弁韓もまた、のちに伽耶という文化的に輝かしい国へと姿を変えた。

図説／国家はどのように変わったか



伽耶は一時期、百済や新羅に並ぶ力を持っていたが、5世紀以降、周囲の大国から圧力を受け、ついには562年、新羅に吸収されてその幕を閉じた。

以上のように、朝鮮半島の古代史は、移動と融合、競争と協調が織りなす壮大な叙事詩である。

北方の風をまといながら南へ向かった人々が、朝鮮半島という舞台で出会い、血と文化を交え、新たな文明を築いていった。

その歩みは、やがて日本列島とも深くつながり、日韓の歴史に深い影を落としていくこととなる。

3 「七支刀」と「広開土大王の碑」

大敗した高句麗

悠久の時の流れを感じながら、三国の歩みを順にたどっていこう。

高句麗の始まりは、霧深き伝説に包まれている。初代王・朱蒙は、まるで星が落ちてきたかのような英雄であった。

彼は卓越した弓の名手であり、天命を受けて国を興したとされる。その生涯は短く、紀元前19年にこの世を去った。しかし、朱蒙の魂は消えることなく、高句麗はその後力強く勢いを増していった。

2代王・瑠璃（ユリ）が王座に就くと、都を鴨緑江（アムノッカン）中流に位置する国内城（クンネソン）へと移した。

この遷都により高句麗はますます国力を高め、やがて313年には中国の支配の名残であった楽浪郡を攻め落とし、独立の道を切り拓いた。

一方、百済の物語は、美しくも儚い調べで紡がれている。

現在のソウル周辺を都にしていた百済が朝鮮半島の南岸にまで勢力を拡大したのは、13代王・近肖古王（クンチョゴワン／在位346～375年）の時代である。

彼は勇ましく兵を鍛え上げ、富国強兵の道を突き進み、南下してきた高句麗を勇敢に打ち破った。

371年には百済軍3万人が高句麗の首都・平壤（ピョンヤン）を包囲し、激しい戦いの

末、高句麗の故国原王（コググォンワン）が戦死するという衝撃的な結末を迎えた。

石上神宮の社宝

372年、勢いに乗る近肖古王は東晋に使者を送り、百済の軍事的勝利と高句麗に対する優位を告げた。

その際、東晋から国家として正式に承認される榮譽を受ける。そして同年、日本にも使者を送り、「七支刀^{しちしとう}」という神秘的な宝刀を献上した。

この七支刀は現在、奈良県天理市にある石上神宮に保管されている。

『日本書紀』にも、神功皇后五二年条に百済から「七枝刀^{ななつさやのたち}」が献上された、という記述がある。石上神宮の七支刀は、その記載に比定される社宝と考えられてきたのである。

石上神宮は古代ヤマト政権の「兵器庫」のような性格を担った社であったので、その後も七支刀を保管するに至ったと考えられている。

この七支刀は、その名の通り、中央の刃から6本の枝が放射状に伸びる幻想的な形をしている。刀身の表裏にある銘文を総合すると、「刀を帯びる者は百の兵を撃退して、王になるほどの靈力を得られる」という内容になるようだ。



石上神宮の神庫で保存された古代の遺品で、社伝では「六叉鉞（ろくさのほこ）」と称されてきたが、現在では剣身に記された銘文により「七支刀」と呼ばれている。特異な形をした鉄製の剣であり、製作年については銘文解釈により西暦369年と考えられている。全長74.8センチの鉄製であり、身の左右に3本ずつの枝刃を段違いに付けている。また、剣身の棟には表裏合わせて60余字の銘文があり、古代史上の絶対年代を明確にする最古の史料となっている。写真提供／石上神宮

これは、外交贈答の儀礼刀である可能性が高いが、百済と日本の間に結ばれた精神的な絆の証であったと言える。

今では、4世紀の百済と日本の関係を物語る第一級の実物史料になっている。

それにしても、百済の「英雄」近肖古王が七支刀を日本に贈った理由を想像してみると、まさに「古代の浪漫」を感じる。近肖古王は日本に対して、どれほどの愛着を見せていたのか。まだ見知らぬ土地に対して、とてつもない興味を持っていたと推察される。

そんな近肖古王が健在なうちは国家も安泰であったが、375年に世を去ってしまうと、百済は徐々に運命の荒波に吞まれることになってしまった。

広開土大王の碑

北の地ではまた異なる物語が進行していた。

時は391年、16歳の若き王が高句麗の玉座に就いた。彼こそが、後世にその名を轟かせた19代王・広開土大王（クァンゲトデワン／在位391～413年）である。彼の登場は、まさに嵐のようであり、風雲急を告げる時代を切り開いていく。

広開土大王は類まれな軍略と果断な決断力で、5世紀前半に東アジア屈指の大帝国を築

き上げた。

広大な大陸を駆け巡り、幾多の戦場を勝ち抜いた彼は、朝鮮半島最大の領土を治める王として君臨した。

だが、その命もまた有限で、彼は413年、38歳の若さでこの世を去った。

その息子・長寿王（チャンスワン／在位413～491年）は、父王の偉業を後世に伝えるため、一基の大きな碑を建てた。

現在も中国・吉林省にそびえる碑には、「国岡上広開土境平安好太王」という廟号が刻まれ、彼の数々の功績が刻み込まれている。

広開土大王の碑には興味深い記述がある。「倭の兵が辛卯年（391年）以来、我らの軍と戦った」という主旨の内容である。

「倭」とは誰を指すのか。

単に日本の軍勢ではなく、日本列島から渡来して伽耶の地に根を下ろし、勢力を築いた人々であると考えられる。

伽耶に定住していた彼らは、地元の社会に溶け込みながらも独自の存在感を放ち、しばしば近隣地域にまで進出していた。

その異国的な装束と戦いぶりが、高句麗の将兵の目に鮮烈に映り、「倭」という言葉に結びついたのだろう。

4 百済が滅亡

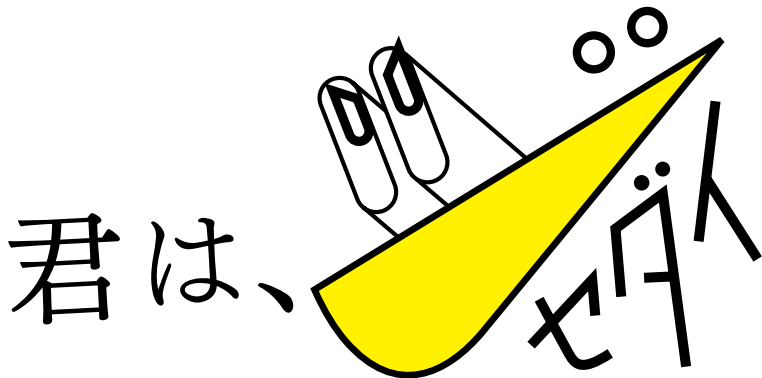
百済の運命

古代の覇権争いはますます激しくなっていた。

475年、高句麗が大軍を率いて百済を攻め、百済は敗北を喫した。

都を南の熊津（ウンジン／現在の公州）へと移した百済は、501年に即位した25代王・武寧王（ムニヨンワン／在位501～523年）の治世下で復興の光を見出した。彼は温和で賢明な政治を行い、国を再び安定へと導いた。

その後、26代王・聖王（ソンワン／在位523～554年）は、538年に国号を「南扶余」へと改めた。



何と闘うか？
<https://ji-sedai.jp>

「ジセダイ」は、20代以下の若者に向けた、
行動機会提案サイトです。読む→考える→行
動する。このサイクルを、困難な時代にあっ
ても前向きに自分の人生を切り開いていこう
とする次世代の人間に向けて提供し続けます。

メインコンテンツ

ジセダイイベント

著者に会える、同世代と話せるイベントを毎月
開催中！ 行動機会提案サイトの真骨頂です！

ジセダイ総研

若手専門家による、事実に基いた、論点の明確な読み物を。
「議論の始点」を供給するシンクタンク設立！

星海社新書試し読み

既刊・新刊を含む、
すべての星海社新書が試し読み可能！

マーカー部分をクリックして、「ジセダイ」をチェック!!!

行動せよ!!!